

# 志茂田 景樹

Shimoda Kageki

作家

1940(昭和15)年、静岡県生まれ。中大法学部卒後に法律事務所や探偵、塾講師、週刊誌記者など20種以上の職を転々とするなかで小説を書き始め、76年に『やっそこ探偵』で小説現代新人賞を受賞し注目される。80年に長編『黄色い牙』で直木賞、84年『汽笛一声』で文芸大賞、94年日本文芸家クラブ特別大賞を受賞。テレビ番組のコメンテーターとしても活躍する一方、99年に妻とともに「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、全国各地でボランティアとして読み聞かせの催しを行っている。童話や絵本も数多く手掛ける。Twitterによる人生相談もフォロワー24万人を越す人気。

## 罰当たりな塾で みんなな夢を描いた

### 旅

先や、ウオーキング途中で通りがかりの寺の境内に足を踏み入れるのは嫌いではない。

何となく足が向くのは大寺小寺の別なく古刹の雰囲気を感じ出しているところである。

境内に入ってみると、歴史に名を留める人物の墓や、句碑、歌碑が建っていた

り、何かの史跡があったりして思わぬ発見に頬が緩むことがある。

しかし、最近では門前にそういう事柄の案内板が掲げられていることが多く、境内に足を踏み入れて驚く前に、そういうところかと、頷くことがほとんどである。それでも、ああ、荻生徂徠の墓がここにあるのか、とか、ヒューズケンはこの



に眠っているのか、と新知識を得たような心地で山門をわくわくと潜る。

ヘンリー・ヒュースケンはオランダ人ながら幕末のアメリカ公使館の通訳官として活躍し、ハリスの懐刀と言われた人物である。

万延元（一八六一）年十二月、尊王攘夷派の浪士たちに襲われ命を落としている。

僕の事務所は東京港区の麻布十番にあり、アメリカ公使館の置かれた麻布山善



福寺は歩いて二、三分のところにある。

ヒュースケンが襲われた場所は古川に架かる中の橋の袂で、その中の橋までも徒歩三、四分である。

ヒュースケンの墓のある光林寺までは歩いて十二分ぐらいだが、ここは五年ほど前、ウォーキングの途中に知ったところである。

さ

て、ヒュースケンの墓前で合掌し、尊皇攘夷の疾風が吹き渡った幕末江戸の情景を想像しながら山門を

出ると、

「あつ、先生！」

と、歩道から声をかけられた。

見ると、五十代後半らしい恰幅のいい紳士が立ち止まって、僕に笑いかけている。

「お解りにならないでしょうね。僕は先生が直木賞を受賞したときから陰ながらずっとご活躍を見守らせていただいております」

恰幅のいい紳士はそこで丁寧にお辞儀をした。

僕は、お辞儀から背筋を真っ直ぐに伸ばした姿勢に戻った彼の顔を改めて見つめた。

しかし、誰だかは思い出せない。熱心な僕の読者かな、と一瞬思ったが、旧知の間柄ですよ、と言っている笑顔だった。

「実は小学五年のときから……」

その言葉と同時に、どこか見る人に安心感を与える彼の団子鼻に不意に記憶が戻った。



「あなたは、あのときの蛇大将の……」  
 「思い出していただけたか。嬉しい  
 です。蛇大将の〇〇です」

「そうかあ、あの〇〇君か。懐かしいな  
 あ。立派になったなあ」

僕は両手で彼に握手し、目頭をツーン  
 と熱くした。

**も**

う四十七、八年も前のことにな  
 る。中央大学留年二年目の僕は  
 酒場で知り合った早稲田大学留年四年目  
 の友がやっている学習塾を手伝うことにな  
 った。

昭和三十年代もあと一年で終わりを告  
 げようという頃だったが、世は高度経済  
 成長の真っ只中であつた。大人は誰もが  
 忙しかった。

その学習塾は西武新宿線の某駅からほ  
 ど近い薬師堂の境内にあつた。そこに檀  
 信徒が何かの集會や、和讃の集まりに使  
 う小さな集會所があつて、週三回塾を開  
 く時間だけ借りていた。

小学生の全学年が対象で、二十人あま

りが通つてきていた。低学年と高学年の  
 二クラスに分けて教えたので、傍目には  
 かなり大変に見えたかもしれない。

でも、全員が小さな商店街の子供たち  
 で、この頃の商店街はどこも目が回るほ  
 ど忙しく、学校から帰つた子供たちの世  
 話を焼くどころではなかつたのである。

つまり、子供の学力増進のためよりも  
 子供をいつとき預かつてくれるところと  
 して有り難がられていた。そんなところ  
 だから早稲田大学留年四年目の友も、中  
 央大学留年二年目の僕もお気楽なものだ  
 った。

彼は僕が読んでも意味不可解の自作の  
 哲学詩を子供たちに朗々と朗読してはば  
 かるところがなかつたし、僕は僕で花札  
 のやり方を教え、子供たちと坊主めくり  
 などをやって楽しんでいた。

そんなところを窓から親の一人に覗き  
 込まれ、

「あんれまー、花札やつとるの！」  
 と、仰天されたことがあつた。

しかし、直後に、菓子袋が飛んできた。  
 「宿題はもうやつてもらつたか。ほれ、  
 みんなで食べな」

差し入れにきた親に限らず、商店街の  
 親はみな概して気さくで大雑把だつた。

花札遊びをしていても親が怒らなかつ  
 たのは彼と僕が宿題だけは丁寧に見てや  
 り、答をどんどん教えてやつたからであ  
 る。これは当の子供たちからも喜ばれた。

**小**

学五年の惣菜屋の子供がいた。  
 体が大きくやんちゃで二、三人  
 いた六年生を押しつけて塾でのガキ大将  
 格だつた。

僕は時々、映画のエキストラもやって  
 いて、あるとき、ヤクザ映画の助監から、  
 「これ、覚えとけよ」

と、数枚の刷り物を渡された。  
 仁義の切り方を切る側と切られる側に

分けて台本風にしたものだつた。

これ覚えたら何か端役でもくれるのか  
 なあ、と期待を持って一生懸命暗記した  
 が、そんなことはしるしほどもなかつた。



その仁義の切り方を惣菜屋の子供に教えたのである。惣菜屋の子供はすぐに覚えた。

「お控えなすつて……」

「いえ、あんさんこそ、お控えなすつて」

「重ねてお願い申します。お控えなすつて、手前、旅中でござんす」

「……」

「さつそくお控えなすつて有り難うござんす。手前、生国と発しまするは……」

二人でやっている、他の子供たちからヤンヤの喝采を受けた。

早稲田大学留年四年目の友が、

「暮れも近いのに、飲み代が足りないなあ。一計、案じようや」

と、言い出し、月謝の前倒し徴収をすることになった。ガリ版刷りの困窮を訴えた嘆願書を作成し、子供たちに持たせた。みんないい親ばかりで、翌々日には月謝袋に前倒し分の月謝を入れて持たせてきた。

惣菜屋の子供は持ってこない。塾の帰

り、僕は惣菜屋に立ち寄り、改めて嘆願書を渡した。

「今日、持たせてやったけど」

惣菜屋のかみさん、つまり、彼の母親は怪訝な顔になった。

でも、すぐにこう呟いた。

「使い込みやがったな、あんちくしょう」

翌々日の授業で一、二、三年生の宿題を見ているとき、新聞紙に包まれた何か窓から投げ込まれて、ドサツと床で音を立てた。

悲鳴が上がり、大騒ぎになった。投げ込まれたものは生きたアオダイショウだったのである。惣菜屋の子供が親に使い込みがばれ、叱られた腹いせにやったことだと解った。

僕ら教師二人は惣菜屋に僕らが不手際だったことを詫び、塾にこなくなった惣菜屋の子供を通学路で待ち伏せして捕まえ、説得を行った。彼はケロリとした顔でまた塾に通うようになった。

僕は蛇大将と綽名をつけ、ときどきそ

う呼んでからかったが、蛇大将は以前にもましてやんちゃで活発な子供になった。

その蛇大将が今、目の前に立っている。

「今はこういうことをしております」

蛇大将は名刺を出して僕にくれた。

建設関連らしい社名が刷り込まれ、肩書は代表取締役になっていた。百人近い従業員がいるという。

「では、これで」

蛇大将は何か心地よい気配を残して去っていった。

## 僕

はあの薬師堂の集会所の時代に帰りたいと束の間、痛切に思っ

た。吹き溜まりに吹かれていたような僕ら留年学生でも勝手に夢を描いて熱く離れた。塾の子供たちは罰当たりな僕らを反面教師にしながら、それぞれにでっかく熱い夢を描いていたに違いない。その時代はあつという間に駆け過ぎた。

でも、今の時代に、これからでも描ける夢を見つけよう、と僕は自分に言い聞かせた。